



Title	小特集 World Wide Views
Citation	科学技術コミュニケーション, 7, 1-1
Issue Date	2010-02
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/42645">http://hdl.handle.net/2115/42645</a>
Type	bulletin (other)
File Information	JJSC7_001.pdf



[Instructions for use](#)

## 小特集 World Wide Views

2009年9月26日、気候変動問題をテーマとして、世界38カ国で約100人ずつの市民が同時に話し合う市民参加型会議World Wide Views (WWViews) が開かれた。コンセンサス会議の開発で知られるデンマーク技術委員会 (DBT) が世界各国に開催を呼びかけたもので、日本でも、大阪大学や上智大学、北海道大学CoSTEPなどでつくる実行委員会が京都市において開催した。温室効果ガス削減や途上国支援など、気候変動をめぐる現在進められている国際交渉のテーブルに一般の市民の意見を届けるとともに、環境問題以外にも、グローバルな規模で様々な課題に対する市民参加を進めるためのモデルを開拓することが、WWViewsの狙いであった。

WWViewsは、気候変動問題というトランス・サイエンス的な性格の強い課題について、各国の市民が「共通の情報」「共通の問い」「共通の会議手法」による会議を行い、その結果を即日集計し、国際交渉の場に政策提言として届けるものであった。その意味で、きわめてユニークな市民参加型科学技術コミュニケーションの実践であったと言える。また会議手法として、コンセンサス会議と熟議型世論調査 (deliberative opinion poll) の要素を取り入れた設計がなされるなど、参加型テクノロジーアセスメント (pTA) 手法の開発という点でも新たな試みであった。

今回、小特集として、このWWViewsの日本での開催に携わった実行委員らによる3本の論考と、研究者と市民とのコミュニケーションに関心を寄せる温暖化リスクの専門家による論稿1本の、計4本を集めた。

八木絵香は、WWViews全体の基本設計とその考え方、日本での開催の詳細を報告した上で、グローバルな規模での市民参加型テクノロジーアセスメントの可能性と課題について検討する。三上直之は、気候変動のようなグローバルなリスクの問題について、「ふつうの市民」が国際的に統一されたやり方で話し合う今回の手法について、とくに会議の進行、ファシリテーターの役割という視点から接近する。山内保典は、会議の約1か月後に、日本会場での参加者を対象に実施した事後評価の質問紙調査の結果を分析しながら、WWViewsの会議設計や情報提供、進行など、会議の企画運営全般について、その妥当性を主に参加者の視点に寄り添いながら検証する。江守正多は、温暖化リスクの専門家の視点から、情報提供の内容や会議設計を検証し、WWViewsのような手法の可能性と限界について問題提起する。

各論考はたがいに独立したものであるが、WWViewsに関する基礎的な情報は冒頭の八木報告において網羅されている。ここからお読みいただくと、他の3つの論考がより理解しやすいだろう。

この小特集を通じて、WWViewsの経験を共有しつつ、グローバル化の中での「科学技術への市民参加」の研究や実践をめぐる議論を豊かなものにする契機を提供できれば幸いである。